

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

10

2015

No.527



特集

- 塩ビ系シート防水のこれから
- 断熱改修が生む経済効果

品質不良の屋上緑化

鈴木 哲夫

以前にも屋上緑化の問題を取り上げたが、同様のズサン工事に類する事例を紹介する。

写真-1を見ると、生態系ができ上がった緑化部分には、バッタなどの生息があり、緑化の本当の姿のようで何かホッとする。容易に立ち入れない屋上であったことから雑草交じりの状態で、昆虫のビオトープになった。屋上緑化としてふさわしい状態であるが、緑化には芝草を植えており、繁殖して根が防水層を突き破っていた。

屋上緑化は、植生を誤ると防水層に与える影響が甚大である。屋上の周囲(緑化部以外)は、防水層の暴れがひどく、根の回りがほぼ全面にわたっており、水分を追いかける性質があることから写真-2のようにパラベット立上りまで広がっていた。このような状態は、パラベット立上り防水層の裏に雨水が供給されている証拠であり、漏水だけでなく防水層に与える影響が大きくなる。

緑化部分の施工は、通常防水層の上に耐根シートをかぶせ、緑化土を施すが、このケースは、耐根シートではなく除草シートであった(写真-3)。想像するに屋上緑化助成制度に基づく補助金目当てで形だけ整えたのか。シートのラップ幅は少なく、除草シート裏に根が潜り、写真-4のように防水層のラップ部を突き破っていた。こうなると、普通であれば十分な耐用性能のある防水層であっても、新築後10年程度で防水改修を行う破目になり、施主は負担を強いられる。

中途半端な屋上緑化の場合、ヒートアイランドを食い止める一助にはなっただろうが、一方では、防水改修を早めたことで廃棄物が増え、資源の無駄遣いとなり、CO₂の削減にもつなげていない。結果的に環境に優しくないばかりか建物の長寿命化にもそれほど貢献していない。行政は、名目だけの屋上緑化工事になって弊害を作り出すという盲点があっても、バラマキ助成を改める気はないのか。



写真-3 緑化部下は、耐根シートではなく、除草シート

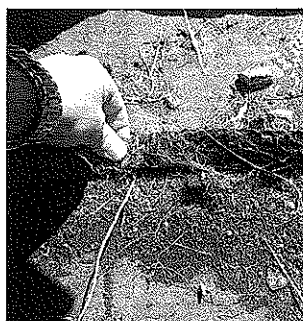


写真-4 繁殖により防水層を突き破った芝草の根

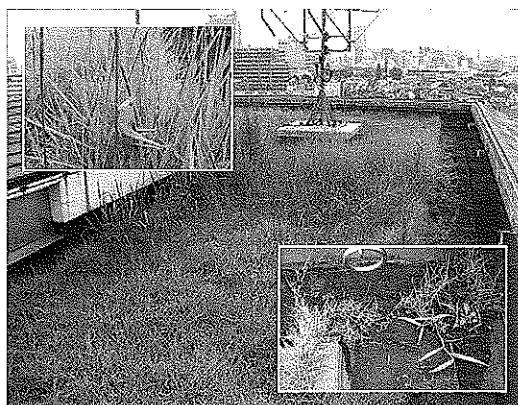


写真-1 芝草を植えた屋上緑化

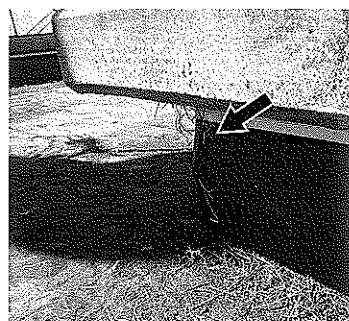


写真-2 立上りに伸びた芝草の根

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役